

固齡草(一名歯牙養生譚)の書誌学*

田 辺 明・森山徳長・石川達也
長谷川正康**・榊原悠紀田郎***

要 旨

明治13年1月版權免許を受け、14年1月上梓された大衆向けの歯科衛生啓蒙書、伊澤道盛著「固齡草」の書誌的詳細を記述した。またその社会的背景、高山紀斎の保歯新論との対比についても述べた。

The bibliography of Dosei Izawa's "Hagatamegusa" which received the copy-right in January 1880 and published in January 1881 was described in some detail. It's social background and the comparison with Kisai Takayama's "The Newer Knowledge on the Preservation of Teeth" were also described.

(キーワード Key words)

固齡草 Hagatamegusa, 歯牙養生譚 Colloquial Story for Dental Hygiene, 書誌学 Bibliography

I. はしがき—著者について

明治初年に西洋歯科医学が輸入され社会の状況も次第に変化しつつあった時代に、最初期に現れ

* Studies on the Bibliography of "Hagatamegusa"

** Akira TANABE, Norinaga MORIYAMA, Tatsuya ISHIKAWA & Masayasu HASEGAWA, Tokyo Dental College 東京歯科大学

*** Yukitaro SAKAKIBARA, Aichigakuin Univ. School of Dentistry 愛知学院大学歯学部

本稿要旨は、第17回日本歯科医史学会学術大会(1989年10月21日、於日本歯科大学)において、田辺が口演した。

た口腔衛生の大衆向啓蒙書の一つが『固齡草』¹⁾である(図1)。

大日本歯科医学会編『歯科沿革史調査資料』²⁾, および日本歯科医師会編『歯科医事衛生史前巻』³⁾によれば、本書の著者伊澤道盛の始祖は、幕府旗本伊澤播磨守正久の庶子徳兵衛有信で、元禄年間に深川伊澤町から麻布鳥居坂に転居し、二世信政からは代々医を業とした。安永年間に、五世信美が口内科に転じて筑前黒田家の典医となり、六世(父)信全および七世信崇とも黒田家に仕えて明治維新を迎えた。

信崇は幼名を三成と称したが、後に父の通称「道盛」を襲名した。分家伊澤盤安について医学を学び、また幕府医官歯医師佐藤道安に師事して口歯科を二年間学び、慶応元年9月より口歯科に従事し、翌年父信全の死後家を嗣いだ。

明治8年、津田仙の紹介で小幡英之助に入門、2年間西洋歯科医術を習得したが、9年または10年頃、松川修に依嘱してタフト氏歯科治療学やメレディス氏歯科治療学を訳させて勉強した。明治11年医術開業試験に合格し、12年1月10日より京橋区銀座2丁目津田仙方に開業し、14年2月元数寄屋町に移り、20年からは麻布の本邸においてのみ診療に従事し、29年1月13日57歳で没した。

II. 出版に至る経緯

在来家であった道盛(信崇)は、西洋式歯科医学を学ぼうと向学心に燃えて小幡英之助に師事したが、西洋歯科医術を学んで免許を得た直後、一般向きの口腔衛生啓蒙書『固齡草』の草稿を完成



図 1 「固齡草——名齒牙養生譚」の表紙兼扉
故今田見信先生より榊原に恵贈されたもので、現在東京歯科大学図書館史料室所蔵

Fig. 1 Cover and Front-page of "Hagatamegusa
—A Colloquial Story for Dental Hygiene"

した。本書は明治12年12月15日に出版版權願を呈出したが、同19日東京府知事松田道之を通じて内務卿伊藤博文に提出され、越えて13年1月17日付で向う30年の版權を許可された。そして一年後の明治14年1月26日『固齡草——名齒牙養生譚』と改題して出版された。高山紀斎の『保齒新論』に先立つこと半年で、和文の類書の嚆矢というべきである。

版權の許可が下付されてから出版迄に満一年を要した事情については不明である。

(なお、道盛は明治20年8月20日「通俗齒の出齦期図解」の版權を得ているが³⁾、所在は不明で未見。)

III. 固齡草の書誌学

1) 書誌学的構成

書誌学的構成は、表紙兼扉—1, 緒言—3, 本文—75, 奥付—1, 広告—2, 付図—2計84頁, 46版(12.5×18.5 cm)縦書, 明朝体旧漢字(ルビ付き)旧平仮名交り文で組版は10行25字詰である。装幀は紙表紙(淡緑青色)仮綴じ本で並製の洋紙を用いている。またその著者の生真面目な性格を反映してか、正誤表(6箇所)が表紙裏に貼付してある。

2) 緒言

緒言の書き出しで道盛は、

『不佞 曩に

内務卿閣下の准允を蒙り爰に齒科醫業を開き爾來患者の來る必ず齒の養生を諮ふ 不佞素より淺學なれば敢て人の爲に養生法を告諭するの識なしと雖嘗て學ひたる所と又自ら経験したる所を以て齒の養生に係ることを譚話すと雖ども其の旨趣を審にする能はずして且遺漏の憾を免れず依って施術の餘暇齒の養生に係るべき者を記して以て其譚話に換へんと慾し名つけて齒牙養生譚と云う(まゝ、但し原文は縦書)……(中略)……』

と書き、後半では、『本書は齒の発生から始めて、義齒の功用利害に終ろうとしたが、今回は齒の充填で擱筆して、義齒と遺漏(口蓋破裂)などは將來次の編で述べようと思う。……(後略、現代文風にアレンジした)』と述べている。しかし実際には続編は出ていない。

最後に『且此の書に於る素より卑見を免れざれば大方の君子其誤謬を糺し或は齒の養生に係る他の良策を告諭給ふことあらば不佞の幸甚なり。

明治庚辰冬至の日 齒科醫生 伊澤道盛誌(まゝ、但し原文は縦書)』と結んでいる。

3) 本文

イ) 目次・段落

本書の本文には目次や見出し区分がなく、全体が区切りのない一連の文章となっている。明治中

期までの書物は漢字仮名交り文であっても、漢文の白文のように段落も句読点もないのが普通である。

大凡本書の内容を順序に分けてみると以下の様になる。

1. 乳歯の発生と萌出順序
2. それに伴う歯列不正
3. 乳歯齲蝕による健康障害
4. 永久歯の萌出
5. 歯牙の構造および化学的成分
6. 齲蝕病因論—歯牙の組成
7. 酸産生説
8. 歯髄炎とその原因
9. 歯牙と栄養摂取論
10. 母体の栄養
11. 歯牙のはたらき
12. 歯牙を保護するための注意—酸味など
13. 砂糖の得失—その他寒冷の害
14. 歯口清掃の必要性
15. 歯石の成因、分析と歯周炎およびその予防法
16. 含嗽と歯刷子
17. 歯磨剤についての注意
18. おはぐろ
19. 充填
20. 金箔充填
21. アマルガム充填—銀膏

ロ) 文体、送り仮名およびルビ

緒言は旧漢字・平仮名(一部くずし字)交り文のままであるが、本文の漢字には平易な話し言葉の振り仮名が、ほとんど全部つけてある。例を挙げれば以下の様になる。

夫人は一生の中に二種の歯を有つ者にして一種を乳歯と稱し一種を永續歯と稱す(書し出し部分 p. 3)

我が齒科の醫術に於る齒列を撓匡の術ありて (p. 8)

内部に齒腔を作り空竇を爲し根の末梢に細管を開き齒髓此の細管を通入し齒腔内に充実す (p.

15, p. 16, p. 28 にも再出)

齒を保護はんとならば營養を以て最も緊要とす (p. 32)

又劇度き咀嚼に由つて齒面(即ち珐瑯層)を破壊るの恐あり若破壊るときは此の質に於ては營養に由て回復補綴ふこと能はざれば… (p. 40)

唾津固形となり齒面に堆積すれば身體の傷害となるが故に爰に於て造物主是が固着を防禦するの裝置を設けたり (p. 50)

ハ) 内容

著者は『養生の目的とする所は人軀を変動傷害する諸件を避け生育を助け健康を保つての作方にし……今大略齒の生理病理を交記して以て養生の作方を識るの易きに便せんと欲するのみ(緒言の一部)』と言っているように、本書で齒の生理と病理につき概論している。

その順序は前述の通りである。明治10年代の始め頃、当時としては最新の米国齒科医学の知識を、平易にかみくだいて一般大衆に教えようと、順序を追ってよくまとめた。平素チェアサイドで、患者に話して聞かせていたものを文章にしたという感じである。

齲蝕の予防法については、Millerの化学細菌説直前の時代であるので、酸味のある食物の制限、砂糖など甘味を摂った後の洗口の勵行、極端な寒熱をさけることなどを挙げている。刷掃、洗口の仕方についても懇切に教える。

充填については概説の後、金箔充填を先ず取上げて論じるが、銀膏(アマルガムと片仮名書きを添える)については、米国でのアマルガム戦争なども引用し、伊沢の経験なども加えさらに詳しく述べている。

ニ) 付 図

76・77頁の間に2頁大紙片に

- 1) 乳歯左側の上下牙窩に根抵するの図
 - 2) 全、永久歯左側の図
 - 3) 下顎大齲歯を縦割して中心を現した図
- 以上3図が印刷、綴込まれている(図2)。

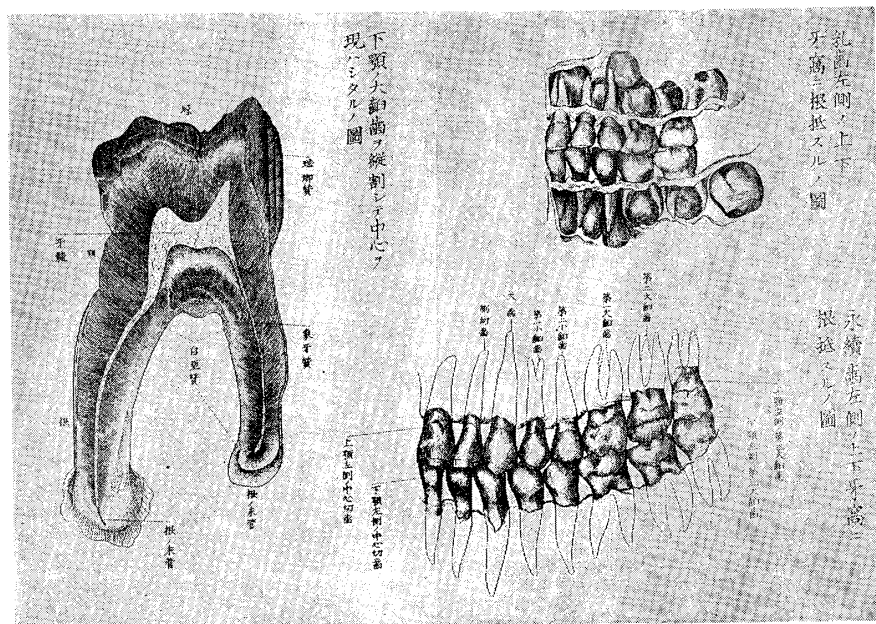


図 2 乳歯、永久歯咬合状態および下顎大臼歯矢状断面を示す付図

Fig. 2 Illustrations on the Occlusal Relationship of the left Deciduous and Permanent Dentition, and the Sagittal Section of the Lower Molar

4) 奥 付

奥付には、前述の版權免許および出版の年月日、定価35銭、著述兼出版伊澤道盛とあり、発兌書林には島村利助、瑞穂屋卯三郎、丸屋善七、丸屋鉄次郎、山中市兵衛の5人が名を連ねている(図3)。

5) 広 告

広告は「磨歯漱玉散」——上好罐入——器25銭箱入10銭、尋常罐入——器10銭、箱入5銭、袋入2銭。

「右の磨歯散は専ら歯を^{じょうぶ}健固にする所の方^{くすり}剤にして尋常の磨歯散の如き砂石の類にて製し歯を損害するにあらざれば用いて其効の虚しからざるを識り給ふべし。齒科醫伊澤道盛製」とあって、全国^{はみがき}の取付店名51が列挙されている(図4)。

IV. 保齒新論との比較

「固齡草」が患者に口腔衛生の話を噛んで含めるように語り聞かせる風の書き方であるのに較べて、「保齒新論」⁴⁾は一応齒科学全般の概論であり、教科書の形式と排列を持っている。記述の分

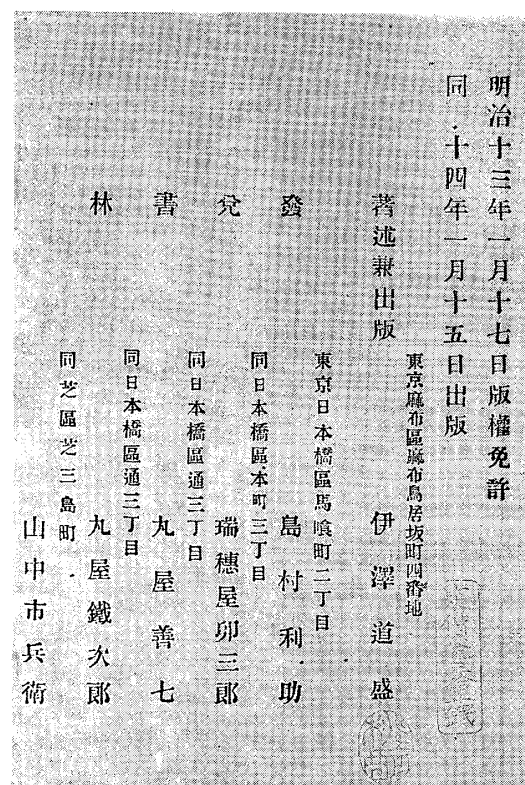


図 3 本書の奥付

Fig. 3 The Imprint



図4 広告頁その1 磨齒漱玉散とその取扱店
Fig. 4 Advertisement page 1 Explanation of the Dentifrice manufactured by Dosei Izawa and the List of its Dealer

量も後者は約2倍で図版も多い。

二者の差の生じた理由は、前者は口中科の医師であった著者が、日本人第一号歯科免許獲得者小幡英之助に師事して、洋方歯科医学を学んだ洋方免許歯科医であったのに対して、後者は米国に留学し、途中歯科に志を変えて米国で歯科の開業免許を取って帰朝、日本の免許を申請し下付されたハイカラ歯科医であったという差にあると思われる^{5,6)}。

基本的に、伊澤は日頃患者に説いていた衛生説話を、そのまま当時の表記法で漢字にルビをつけて読み易く理解し易く書いた。ただし、漢文調で段落は無く、送り仮名も一部に万葉仮名を含む変体仮名交り文である。

これに反して高山は、おそらく一般医師や教養人を目指してであろう、米国の教科書風にきちんと20章に分って、歯科の解剖・生理・病理の概略を理路整然と記述した。ルビは付けず、当時科学論文や法令などの公用文に用いられた片仮名を用

いた。すなわち両書の差は、目的は専門外の一般人に歯科医学の病理と衛生を説くことにあったが、おのずから著者の経歴、個性の違いがもたらしたものであった。

V. ま と め

伊澤道盛の著、一般庶民向け口腔衛生の啓蒙書『固齡草』の書誌学的詳細を述べた。2年前に同門の桐村克巳・小幡英之助校閲の「歯の養生法」が出版されているが、パンフレットを訳した程度のものと思われ、類書ではわが国で初めての本格的な出版物で、今日でも通用する内容のものである。その半年後に出た高山紀斎の『保齒新論』は、歯科学概論の教科書の形式を持っているが、内容は同じ口腔衛生啓蒙書である。両者の比較にも論及した。

本書は、故今田見信先生から筆者の一人榊原が頂戴したもので、東京歯科大学図書館史料室に寄贈し、現在は同大学が所蔵している。

(付)

なお、日本大学松戸歯学部谷津三雄教授より、『1) 本書は pulp chamber を歯腔と記して腔の読みをはっきり「くう」と記載していること、2) 補綴の文字を始めて使用したこと』の追加をいただいたことを記して深謝する。

また道盛が医術開業試験に合格した明治11年の時点の資格は口中科で、本書では歯科醫伊澤道盛と自稱している点につき設問されたが、法規上明治17年以前は、「舊試験合格」と歯科醫籍(明治36年末現在・大日本歯科醫會編)には明記してあるので、設問の通りであり、移行期に在ったと解される⁷⁾。

参考文献

- 1) 伊澤道盛：固齡草——名齒牙養生譚，著者蔵版，東京，明治14年1月
- 2) 高橋直太郎：歯科沿革史調査資料，大日本歯科医学会，東京，大正15年12月
- 3) 小川正一郎：歯科医事衛生史前巻，日本歯科医師会，東京，昭和15年10月
- 4) 高山紀斎：保齒新論上・下巻，英蘭堂，東京，明治14年6月

- 5) 榊原悠紀田郎：歯の星のとき―「固齡草と保齒新論」，日本齒科評論社，東京，昭和56年4月
- 6) 森山徳長・田辺 明・石川達也・長谷川正康：高山紀斎著「保齒新論」および「齒の養生」について，日本齒科医史学会会誌，14(4)：263-271，昭和

和63年8月

- 7) 谷津三雄：齒学史資料図鑑，医齒薬出版 KK，東京，昭和51年11月

別刷請求：〒112 文京区白山5-3-12 森山徳長宛